

杨 明◆著

语言研究

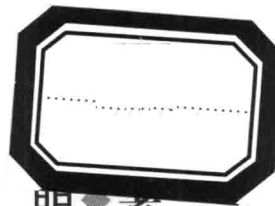
结果构式的认知语义研究 ——以中、日、英为例

結果構文の認知意味論的研究-中、日、英を例に



知识产权出版社

全国百佳图书出版单位



杨 明◆著

语言研究

结果构式的认知语义研究 ——以中、日、英为例

結果構文の認知意味論的研究-中、日、英を例に



知识产权出版社

全国百佳图书出版单位

内容提要

以动补结构做谓语的结果构式句表达致使事件,但是致使的意义来自何处却始终众说纷纭,莫衷一是。本书在认知构式语法的理论框架下详细对比了汉语、日语和英语的致使句式并主张:以特定动词或形容词类别按照特定句法模式组合的动补结构作谓语的汉语结果构式的抽象句法(SUBJ-V-RP-OBJ)具有强烈的格式塔性质;它编码了抽象的致使事件(CAUSE-BECOME),即所谓的构式(construction)。因此,具体的结果构式句的具体意义是在具体的动词或者形容词的具体意义和抽象构式意义相互整合中产生的。详细地解析动词和构式在语义层面、论元结构层面的相互作用以及二者的概念整合过程也是本书的重要内容。

责任编辑:陈晶晶

责任出版:刘译文

图书在版编目(CIP)数据

结果构式的认知语义研究:以中、日、英为例/杨明著. —北京:知识产权出版社, 2013.9

ISBN 978-7-5130-2290-3

I. ①结… II. ①杨… III. ①语义结构—对比研究—汉、日、英 IV. ①H030

中国版本图书馆CIP数据核字(2013)第220800号

结果构式的认知语义研究

——以中、日、英为例

JIEGUO GOUSHI DE RENZHI YUYI YANJIU

——YI ZHONG RI YING WEI LI

杨明 著

出版发行:知识产权出版社

社址:北京市海淀区马甸南村1号

网 址: <http://www.ipph.cn>

发行电话:010-82000860 转 8101/8102

责编电话:010-82000860 转 8391

印 刷:知识产权出版社电子印制中心

开 本:787mm × 1092mm 1/16

版 次:2013年9月第1版

字 数:243千字

邮 编:100088

邮 箱:bjb@cnipr.com

传 真:010-82005070/82000893

责编邮箱:shiny-chjj@163.com

经 销:新华书店及相关销售网点

印 张:10

印 次:2013年9月第1次印刷

定 价:39.00元

ISBN 978-7-5130-2290-3

出版版权专有 侵权必究

如有印装质量问题,本社负责调换。

序 文

楊明氏は湖南大学日本語文学修士課程を修了後、2003年に千葉大学文学研究科修士課程に入学、日本語学の専門家で特に奄美方言研究の第一人者である松本泰丈先生の指導学生となった。そして2005年に社会文化科学研究科博士課程（人文社会科学研究科の前身。略称：社文研）に進学したが、1年後に松本先生が退職することになり、楊明氏はそれと同時に「経済的の」事情から就職をするということで退学届を提出した。私は修士課程では松本先生とは違う専攻に所属していたので、その頃の彼のことは知らなかったが、博士課程の試験委員として彼の修士論文を読み、面接試験で質疑を行って、彼の言語学に関する知識の深さと新しい理論への探究心に、他の学生に比して抜きん出た力を感じていたので、1年での退学の話聞いて大変驚いた。彼をこのままやめさせるのは非常に惜しいと思い、説得して退学を休学に変更させ、松本先生の後を引き受けて彼の指導教員になることにした。もっとも、もうすでに就職先も決まっていたので、とりあえず休学ということにして、1年間やってみてそのまま仕事を続けたいと思うなら退学の道を、やはり研究を続けたいと思うなら復学を選べばよいという話にした。

もちろん彼自身も学業を続けたいという希望は強く持っており、休学中も勉強会活動などを続け、1年後には会社をやめ復学した。それからの彼の研究進展のスピードは目を見張るものであり、特に理論面において広範な知識とその応用力を見せながら論文の執筆を進めていった。それに加え、湖南大学の出身者は一般的に日本語の実践能力が極めて高いが、彼は中でも飛びぬけており、会話力もさることながら、日本語で書いた論文にほとんど文法的な間違いがないのは驚異的だった。通常、留学生の日本語論文を指導する場合、中身を理解する前にまず「てにをは」の間違いから直していかなければならないことが多いので、それに労力を費やして内容の評価が後回しになってしまうのだが、楊明氏の論文は、相当日本語ができる人でも避けられない「は」と「が」の間違いすらほとんど無く、へたな日本人の文章よりよほど読みやすい。そのことだけでも、母国へ戻って日本語を教えたら、非常に優

秀な教師になれるのではないかと思っていた。

本書は楊氏が2008年に完成させた社文研の博士論文で、中国語の動補構造についての理論的な分析であり、中国国内のみならず、日本でも近年多くの研究者が関心を持って取り組んでいる分野である。氏は Jackendoff と影山の語彙概念意味論、Goldberg & Jackendoff の構文文法、Dowty のプロトロール理論、Pustejovsky の生成語彙意味論、Langacker の認知言語学的アプローチなど、最新の言語理論を十分に消化した上で、従来の動補構造に関する議論を批判的に検討し、構文文法に基づく分析によって、これまでの議論では説明しきれなかった問題に対する解法を提案した。その完成度の高さは審査委員全員の評価の一致するところであり、2009年3月、社文研教授会において満場一致で博士号（文学）の授与が承認された。社文研の論文審査は非常に厳しいものであり、審査委員会を通過したものでも、最終的に教授会の場でひとつひとつ議論にさらされ、必ずといっていいほど否決票が出るもので、否決者ゼロというのは非常に稀なケースである。

このように、彼の言語学者としての能力は十分に認められており、本来ならすでに大学で教鞭をとっていてもおかしくないのだが、今のところその卓抜した語学力を生かすのみの状況にある。本書を世に問うことが、研究者として彼がこれから一段と飛躍するための第一歩となることを期待したい。

千葉大学人文社会科学研究科教授 中川裕

2013年6月

目 次

序 文	I
第一章 序章	1
第一節 結果構文と動補構造について	1
第二節 研究の目的	2
第二章 理論的な枠組み	3
第一節 はじめに	3
第二節 語彙アスペクト (Aktionsart)	3
第三節 中国語動詞の語彙アスペクト	4
第四節 アスペクトの揺らぎ	5
第五節 語彙意味論の限界	7
第六節 構文文法の言語観	9
第七節 まとめ	13
第三章 事象構造	15
第一節 はじめに	15
第二節 事象タイプ	16
第三節 まとめ	36
第四章 結果構文における構文の存在	37
第一節 はじめに	37
第二節 先行研究と問題点	37
第三節 弱い結果構文と強い結果構文	40
第四節 概念構造レベルの事象合成 (Event Composition) : 影山 (1996)	42
第五節 結果構文における構文の存在証拠 (Usage-based Model)	44
第六節 結果構文と用法基盤モデル	53
第七節 まとめ	54
第五章 動詞と構文の統合	55
第一節 はじめに	55
第二節 動詞と構文の意味統合	55
第三節 参与者役割と項役割の融合	64
第四節 まとめ	66

第六章	プロフィールと含意属性の変動	67
第一節	はじめに	67
第二節	プロト・ロール理論：Dowty (1991)	67
第三節	概念構造のプロフィールと項の統語写像	69
第四節	まとめ	88
第七章	融合原則の提案	89
第一節	はじめに	89
第二節	Li, Yafei (1995) の指定条件	89
第三節	Li, Yafei (1995) の問題点	92
第四節	融合二原則の提案	97
第五節	まとめ	98
第八章	プロフィール継承による構文構築	99
第一節	はじめに	99
第二節	プロフィールの継承による構文構築	100
第三節	Broccias (2003) の分析	102
第四節	まとめ	103
第九章	プロフィールの部分継承による構文構築	105
第一節	はじめに	105
第二節	非能格自動詞の場合	105
第三節	自動詞として用いられる他動詞の場合	119
第四節	まとめ	128
第十章	プロフィールの反転継承による構文構築	129
第一節	はじめに	129
第二節	プロフィールの反転継承	129
第三節	まとめ	136
第十一章	原因役割と使役主役割の直接融合	137
第一節	はじめに	137
第二節	直接融合の意味制約	137
第三節	抽象的な非対称関係	140
第四節	まとめ	141
第十二章	結 語	143
第一節	動詞主導と認知主導	143
第二節	結 論	145
第三節	今後の課題	146
主要参考文献		147

第一章 序 章

第一節 結果構文と動補構造について

結果構文[●](resultative construction)というのは、プロトタイプとして、使役主 (causer) が被使役主 (causee) に何らかの働きかけを行なうことによって被使役主の変化を引き起こすといったような使役事象 (causative event) を表現し、単一の節において行為 (action) と結果 (result)、そして使役主と被使役主がそれぞれ自立形式でシンタクスに明示される言語表現のことである。例えば、次のような例がある。

- (1) 武松 打 死 了 老虎。
武松 殴る 死ぬ PERF 虎
武松が虎を殴り殺した。
- (2) 滔滔 吹 灭 了 蜡烛。
滔滔 吹く 消える PERF キャンドル
滔滔がキャンドルを吹き消した。

上記の二文が現代中国語における他動詞型の結果構文の典型例（便宜のため、特別な場合を除いて「他動詞型の結果構文」のことを略して「結果構文」と呼ぶことにする）である。記号化の関係からいえば、使役主は、主語の「武松」と「滔滔」であり、被使役主は、目的語の「老虎」と「蜡烛」で表される。また、使役行為は、前項述語の「打」と「吹」であり、使役結果は、結果述語の「死」と「灭」で表現されている。さらに、「前項述語」と「結果述語」の組み合わせは、いわゆる「動補構造」と呼ばれる合成構造を構成する。仮に主語を「SUBJ」、目的語を「OBJ」、前項述語を「Verb (V)」、結果述語を「Resultative Predicate (RP)」で示すと、結果構文の文法構造または統語形式は、次のように表現することができよう。

[SUBJ(主語)]—[V(前項述語)—RP(結果述語)]—OBJ(目的語)]

V-RP (動補構造)

意味の側面からいえば、中国語の結果構文は使役事象を記号化する文法構文 (grammatical construction) である。(1) を具体例にとって言えば、「武松打虎」ことによって「老虎死」という状態変化が起きるという使役事象を表す。

① 結果構文には、他動詞型の結果構文 (transitive resultative construction) と自動詞型の結果構文 (intransitive resultative construction) の下位分類ができる。前者は、[SUBJ(主語)-V(前項述語)-RP(結果述語)-OBJ(目的語)] という文法構造を取っているが、後者は、[SUBJ(主語)-V(前項述語)-RP(結果述語)] という文法構造を取っている。本書の考察は、基本的に他動詞型の結果構文だけに限る。

第二節 研究の目的

これまでの数多くの先行研究によると、結果構文の動補構造において、前項述語は基本的に活動・行為を表し、その行為による結果までは含意しないものであり、結果述語は＜非対格性＞や＜非意志性＞を意味特徴とする自動詞および形容詞であるという点が指摘されている（荒川, 1982; Tai, 1984; 望月, 1990; Li, Yafei, 1993; 沈力, 1993; 徐丹, 2000; 石村, 2000 など）。しかし、前項述語と結果述語は単独の述語としてはどちらも使役の意味をもたないにもかかわらず、動補構造が形成されたときに、「殴り殺す」というように使役他動詞と同じ意味機能が備わるようになる。これまでの先行研究では、使役の意味がどこから生じてくるのかという根本的な問題については十分な説明が与えられていない。また、動補構造を複合動詞として扱う傾向があるが、前項述語と結果述語との組み合わせの生産性の高さを考慮すると、それは首肯しかねる。

それに対して、本書では、結果構文において特定の動詞クラスが特定の統語的順序で配列されて成立する動補構造にみられる慣習化された合成パターンが使役スキーマ（[CAUSE-BECOME]）を記号化する構文（construction）であると主張する。従って、記号ユニットとしてレキシコンに登録されているのは、多くの場合、具体的な複合動詞ではなくて、むしろ抽象的な意味を表す構文と具体的な意味を語彙化した動詞や形容詞であることになる。個々の結果構文が表す具体的な意味は、構文の抽象的な意味と動詞の具体的な意味が統合されることによって構築されることになる。本書では構文文法の立場から、日本語や英語と対照しながら、結果構文に構文の存在を確認した上で動詞と構文とのダイナミックな相互作用によって結果構文が構築されていくメカニズムを解明することを目的とする。

第二章 理論的な枠組み

第一節 はじめに

個々の動詞は、アスペクト・マーカ―や時間表現と統合する可能性および統合後の意味により、状態 (State)、活動 (Activity)、到達 (Achievement)、達成 (Accomplishment) といった四つのアスペクト・カテゴリーに分類され、それが動詞の固有の語彙アスペクト (Aktionsart) として捉えられる傾向 (馬慶株, 1981; Tai, 1984; 郭銳, 1993 など) がある。しかし、この分類法は、アスペクトにかかわるカテゴリーを動詞の固有の性質として固定させて静的な分類を行うので、結果述語の付加や目的語名詞の限界性によってもたらされるアスペクト揺らぎといった現象を説明することができない。それに対して、本書では、アスペクトは、動詞の語彙的な性質ばかりではなく、動詞と文中の他の要素 (文法構文も含める) との相互作用によって決まるため、節 (clause) や文といった統語的なレベルで検討すべきだと考える。節レベルのアスペクトは本書で事象タイプ (event type) と呼ぶ。

第二節 語彙アスペクト (Aktionsart)

語彙アスペクトの研究で最も広く受け入れられているのは、Vendler (1967); Dowty (1979) である。Vendler (1967) では、「What happened?」、「be-ing」、「in an hour」、「for an hour」のようなテスト基準を用いて、時間的な継続、時間的な終点および内的な時間構造などの時間的な属性により、英語の動詞を下記の四つのタイプに分類している。

(1) (a) STATE (状態) :

Non-actions that hold for some period of time but lack continuous tenses.

(b) ACTIVITY (活動) :

Events that go on for a time, but do not necessarily terminate at any given point.

(c) ACCOMPLISHMENT (達成)

Events that proceed toward a logically necessary terminus.

(d) ACHIEVEMENT (到達)

Events that occur at a single moment, and therefore lack continuous tenses.

(Vendler, 1967)

Taylor (2002) によると、以上の四つの分類で最も基本的な区別は、限界的であるかそれとも非限界的であるかである。そのうち、活動と状態は均質な事象として捉えられる。というのは、これらの事象は複数の時間的な断片に切り分けても、同じ種類

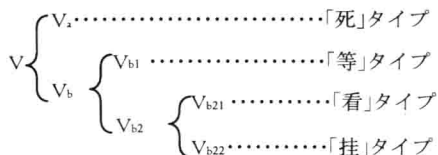
の断片が得られるからである。しかし、達成は均質な事象として考えることができない。この意味的な区別については、Vendler(1967)、Dowty(1979 : 57)、Pustejovsky(1995 : 16)、Rothstein(2004 : 20) は、「Imperfective Paradox(未完了の逆説)」で分かりやすい説明を与えている。

- (2) a. John is running. (Therefore, John has run)
 b. John is building a house. (*Therefore, John has built a house)
 (Pustejovsky, 1995 : 16)

(2) a では、「John has run」という命題が含意として含まれている。つまり、「John」が「run」という動作をすでに行っているということである。しかし、(2) b では、「John has built a house」という命題が含意として含まれていない。というのは、「build a house」が表現するのは均質な事象ではないからである。

第三節 中国語動詞の語彙アスペクト

中国語の語彙アスペクトの研究に関しては、马庆株(1981)や郭锐(1993)などが挙げられる。ここでは、马庆株(1981)を取り上げてみよう。同論文では、「着」との共起可能性により、中国語動詞をまず「非継続動詞(V_a)」と「継続動詞(V_b)」というふうに大きく二つに分けて、そして、統語パターン①[●]における後置時間詞が、動作の継続時間のみを指すのか、それとも動作の継続時間も動作完了後の経過時間も指すことができるのかによって継続動詞を「強い継続動詞(V_{b1})」と「弱い継続動詞(V_{b2})」に分類している。さらに、統語パターン②[●]において、時間補語が動作の継続時間を指すのか、それとも、動作の継続時間と動作による結果状態の残留時間の両方を指すことができるかにより、「「看」タイプ(V_{b21})」と「「挂」タイプ(V_{b22})」に分けられている。具体的には次のようになる。



(马庆株, 2005 : 9)

また、上の分類を[±持続](durative)、[±完了](telic)、[±状態](static)という三つの意味特徴を用いて次のように表現できるという。

- V_a [+完了]、[-継続]
 V_{b1} [-完了]、[+継続]
 V_{b21} [+完了]、[+継続]、[-状態]
 V_{b22} [+完了]、[+継続]、[+状態]

(马庆株, 2005 : 7)

- ① ① V+(了)+T+了 例: 看(了)三天了。(三日見続けた or 見てから三日経過した)
 ② ① V+(了)+T+了 例: 看(了)三天了。(三日見続けた or 見てから三日経過した)

第四節 アスペクトの揺らぎ

Dowty (1979:62)、Pustejovsky (1995:16)、Talyor (2002:401)、Tenny&Pustejovsky (2002:6)によると、アスペクトは、必ずしもすべて動詞のみによって決められるものではなく、動詞と組み合わさる名詞句や前置詞句や副詞などのような補語または修飾語の意味にも大きく影響されると指摘している。例えば、Tenny&Pustejovsky (2002) は次のように述べている。

It is also now generally accepted that we must talk about the aspectual properties of the verb phrase or the clause, rather than simply the aspectual properties of the verb, since many factors including adverbial modification and the nature of the object noun phrase interact with whatever aspectual properties the verb starts out with.

(Tenny&Pustejovsky, 2002 : 6)

英語だけではなく、中国語動詞のアスペクトの揺らぎも、马庆株 (1981) ですでに観察されている。例えば、次のような例が挙げられる。

- (3) a. 挂 着 画。
 掛ける PERF 絵
 b. 正 挂 着 画, 他 来 了。 (動作の継続)
 正に 掛ける ZHE 絵 彼 来る PERF
 丁度絵を掛けているところへ、彼が来た。
 c. 墙上 挂 着 一幅 山水画。 (状態の持続)
 壁の上 掛ける ZHE 一幅 山水画
 壁に一卷の山水画が掛けてある。 (马庆株, 1981;2005 : 7)

马庆株 (2005 : 7) によると、(3)aの「挂」は、(3)bの他動詞構文において、継続相を表す「着」と共起すると、動作の継続を意味し、活動的である。ところが、同じ「挂」でも、存現構文の(3)cで「着」と共起すると、「挂山水画」という動作が行われた後に現れてくる被動作主「山水画」の存在状態の継続を表現している。つまり、「山水画が掛けてある」ということである。このように、同じ動詞であっても、生起する文法構文により、全く異なる事象タイプが表現されることもよくある。

また、目的語や補語のような動詞以外の成分の性質によってアスペクトが変動することがよく観察されうる。例えば、次の例がある。

- (4) a. *李四 一分钟 吃 了 苹果。
 李さん 一分間 食べる PERF りんご
 b. 李四 一分钟 吃 了 两个苹果。
 李さん 一分間 食べる PERF 二つのりんご
 李さんは一分間で二つのりんごを食べてしまった。

(4)aの表す事象タイプは時間詞が述語の前に置かれ得ないので、非限界的な活動タイプであると考えられる。一方、b文は時間詞が述語の前に置かれ、動作の終点までの時間を指し示しており、事象タイプは限界的な達成である。

この二文を観察してみると、異なる点は目的語名詞の数量詞の有無だけである。

沈家煊 (1995) によると、数量詞をもつ目的語名詞はもっぱら個体事物を指し示し、限界のある事物を意味する。一方、裸の名詞、特に動詞の目的語となる裸の名詞は類を指し示す総称名詞で限界のない事物を指し示すものである。(4) が示すように、目的語名詞が限界的であれば、アスペクト（事象タイプ）も限界的 (telic) である。一方、目的語名詞が非限界的であればアスペクトも限界的でない (atelic)。つまり、アスペクトは名詞の限界性にも大きく左右されることがあることがわかる。

また、動詞以外の文の成分によってアスペクトが大きく変動する現象は、(5)b のような結果構文の場合にも同様に観察されうる。

- (5) a. *小张 三分钟 就 锯 了 那棵树。
 張さん 三分間 すぐに 鋸で切る PERF その木
 b. 小张 三分钟 就 锯 断 了 那棵树。
 張さん 三分間 すぐに 鋸で切る 切れる PERF その木
 張さんは三分間でその木を鋸で切ってしまった。

沈家煊 (2006c) によると、時間数量詞は述語の前に置かれたときに、限界動作として捉えられる。(5)a は前置時間詞が現れ得ないので、非限界的である。一方、b の結果構文は前置時間詞が現れ得るから、限界的な達成事象を表すと考えられる。a 文と b 文を比較すると分かるように、述語動詞がいずれも「锯」であるにもかかわらず、アスペクトが異なっているのである。このように、動詞だけではなくて、結果述語といった成分もアスペクト・タイプ（事象タイプ）の決定に影響を与えているといえる。

陈平 (1988) も、「读、说、写」などの単音節動詞が往々にして異なるアスペクト・タイプに現れうることを根拠にして、事象タイプを決める要素は動詞だけではなく、ほぼ全ての文要素を含むと指摘している[●] (ibid., p. 405-415)。具体的には次のように述べている。

有必要再次强调指出句子在情状类型方面的归属，并不单纯取决于谓语动词本身，而是由动词和其他句子成分共同决定的。动词的重要作用在于，它的语义性质为句子的情状归属提供了数量不一的可能性，而其他句子的成分所起的作用则是在有关可能性中进行选择，具体确定了句子的情状类别。

(陈平1988 : 405-415)

戴耀晶 (1997) も基本的に同様な見解を示している。さらに、同論文は動詞の性質とアスペクトの関係について具体的に次のように述べている。

动词是体意义的集中体现者，研究动词对于体的研究有特殊重要的作用，但是，动词并不是体意义的唯一体现者，甚至也不是体意义的承载单位。体意义的承载单位是句子，动词只有在句子中才能体现出体意义，句子中的每一个要素都可以对体意义发生影响。

(戴耀晶, 1997 : 4)

これに対して、马庆株 (2005 : 8) では、上掲の (3) に見られるアスペクトの揺らぎの原因について、「挂 (V_{b22} 類)」という動詞は、[+完了]、[+継続]、[+状態]

● 陈平 (1988) は、事象タイプを決定付ける要因が「動詞 > 目的語または補語 > 主語 > 他の文要素」のようなヒエラルキーを成していると主張している。

という意味特徴があり、＜瞬間的な動作＞、＜継続的な動作＞、＜静的な状態＞の三つの意味を表すことができるからだと分析している。つまり、構文形式を含めた他の要素からの影響などを認めず、動詞の語彙項目に異なる意味をすべて付与することで説明しようとしているのである。馬庆株 (1981) のこの考え方は、動詞決定論ともいうべきものであろう。これは本質的に Levin, Beth & Malka, Rappaport Hovav (以下は L&RH という) (1995)、RH&L (1998) に代表される語彙意味論 (Lexicosemantic) の立場であるといえる。

第五節 語彙意味論の限界

L&RH (1995)、RH&L (1998) などは、述語分解 (Predicate Decomposition) の分析手法を用いて Vendler (1967) の動詞四分類の意味構造を分析し、下記の (6) に示されるような構造的な側面を抽象的な述語概念で表示する語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure) と呼ばれる語彙意味テンプレート (Lexical Semantic Template) を提案している。

- (6) [x ACT<MANNER>] (ctivity)
 [x <STATE>] (state)
 [BECOME [x <STATE>]] (achievement)
 [[x ACT<MANNER>] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]] (accomplishment)
 [x CAUSE [BECOME [y <STATE>]]] (accomplishment)
 (RH&L, 1998 : 108)

彼女らは、ある動詞の意味が語彙意味のテンプレートと定項 (constant) という二つの主要な要素から構成されていると考えられている。ここの語彙意味テンプレートは、[ACT]、[BECOME]、[CAUSE] といった原始的な述語 (primitive predicate) による特定の結合から構成されており、動詞の意味の構造的な側面 (structural part) を表現するものである。一方、定項は、動詞によって異なるもので、動詞意味の特異的側面 (idiosyncratic part) を表すものであるという。特有な側面とは、RH&L (1998) によると、ある動詞を同じ意味クラスに属するほかのメンバーから区別するための側面である。一方、構造的な側面とは、文法的に関連する動詞の意味クラスの決定づけに関係する側面である。それを想定する際に重視されるのは、統語構造への反映である (影山, 1996 : 47-48)。具体的に言うと、項の統語構造への実現 (Argument realization) に関係する性質、即ち、項の統語表現をリンキング規則によって決定する際に関わってくる側面が重視される。また、それは統語的および形態的な属性を共有するといった文法的に相関する動詞の意味クラスを特徴づける側面でもあったと考えられている (L&RH, 2005)。

しかしながら、上に示されるようなテンプレートが必ずしも単語レベルの動詞や形容詞だけに語彙化される (lexicalize) とは限らず、結果構文や使役移動構文といった統語構造 (構文の形式面) にも記号化されるケースも存在することは、Goldberg (1995) が構文文法 (Construction Grammar) の立場から指摘している。

Goldberg(1995) は、主として項構造構文のアプローチで次のような例文を取りあげて語彙意味論の限界を指摘している。

- (7) He *sneezed* the napkin off the table.
 (8) She *baked* him a cake.
 (9) Dan *talked* himself blue in the face. (Goldberge, 1995 : 9)

Goldberg(1995) によると、上のいずれの例も、動詞が補部に直接目的語を要求しないものであることが直観的に窺える。語彙意味論の理論では、構造化された語彙項目を備える動詞が項の統語構造への写像を決めるという動詞写像のアプローチ (projectionist approach) の考え方では、例えば、(7) を説明する場合、自動詞の代表例である *sneeze* が実際には3項の [X CAUSE Y to move Z by sneezing] という意味をもつと言わなければならない。(8) の場合は、*bake* に動作主 (Agent)、主題 (theme)、意図される受容者 (recipient) という3項からなる特別の意味があると言わなければならないが、これは結局、*bake* が [X INTENDS TO CAUSE Y TO HAVE Z by baking] のような内容を含む意味を持つことになる。また、(9) を説明するには、*talk* に [X CAUSE Y TO BECOME Z by talking] という特別な意味を仮定しなくてはならないことになってしまう (ibid., p. 9)。つまり、動詞に多義性を付与することによって、異なる文脈に現れる異なる意味を説明しようとしているわけである。しかしそうすると、国広哲弥 (1997) の言葉を借りれば、「文脈の影響を受けて違って見える語義を細かく追及していけば、多義はいくらでも数を増す」ということになりかねないので、レキシコンは膨大なものになってしまうのである。その意味では、語彙の意味記述の面においても、非常に非効率で不合理であるといわざるを得ない。

Goldberg(1995) は、上述のような語彙意味論の立場を批判し、完全に語彙をベースに置いた文法への語彙意味論的なアプローチは不十分であるということ、語彙的に満たされない状態の構文が、それらを具体化する特定の語彙項目とは無関係に存在すると認識しなければならないと指摘する。

語彙意味論者の中心人物とも言われる RH&L も、RH&L(1998) において、Goldberg(1995) の構文文法の考え方を取り入れて、先に取り上げた原始的な述語から構成される語彙意味のテンプレートのリストは、普遍文法 (UG) から提供されるオートロジーのタイプであり、かなりの程度まで事象タイプと対応しているという理由で、語彙意味テンプレートという呼び方を廃止し、その代わりに、事象構造テンプレート (event structure template) と呼んだ (ibid., p. 106-107)^①。さらに、RH&L(2008) は、それを事象スキーマ (event schema)^② と呼ぶようになっている (ibid., p. 3)。また、影山 (1996) でも、語彙概念構造 (LCS) という用語を用いているが、但し書きとして、「語彙」というのは、

① 少し補足するが、構文文法では、動詞の意味について単なる特有な側面、つまり、定項の意味とその意味に結びつく参与者しか持たず、構文の意味構造に動詞の定項の意味や参与者役割が融合される (integrate) ことで全体の意味が得られると捉えられている。一方、RH&L(1998) では、テンプレートに備わる構造的な意味と動詞の定項の意味が組み合わさった事象構造全体が動詞の意味とする立場を取っている。言い換えれば、統語構造と直結する構造的な側面 (テンプレート) を動詞のものとするか、それとも構文のものとするかという点が構文文法と意見の分かれるところである (RH&L(1998) の付録も参照)。

② 事象スキーマ (event schema) について RH&L(2008) は次のように述べている。 "...a structural component representing an event type; which we refer to as an event schema. There is a limited inventory of event schemas, representing the types of events available for linguistic encoding" (RH&L2008 : 3).

決して「一つの単語」という意味ではなく、LCS は、基本的には個々の単語の概念的意味を示すのであるが、単にそのような静的な表示であるだけでなく、組み替えや合成といったダイナミックな操作も受けると述べている (ibid., p. 48)。単語レベル以上の合成や組み替えという操作を認めている以上、LCS 及び「内項 (internal argument)」や「外項 (external argument)」からなる項構造は、必ずしも動詞そのものに属するものではなく、構文に属するものであると主張する構文文法の立場と似通った側面もあるように思われる。

第六節 構文文法の言語観

英語のアスペクト研究で、特定の統語構造が達成事象を表現するという指摘は Dowty (1979) にみられる。Dowty (1979) では、達成事象を表現するのは、達成動詞のみならず、「wiggle NP loose」のような結果構文や「read oneself to sleep」のような前置詞フレーズ補語 (Prepositional Phrase Complements) などの 6 種類の統語構造も達成の統語構造的タイプ (Syntactic types of Accomplishments) として列挙されている (ibid., p. 70-71)^①。また、陳平 (1988) にも、「墙上挂着奖状 (壁に賞状が掛けてある)」のような「場所名詞+動詞+存在物」という存在現象構文も静的な存在事象を表すという指摘がある (ibid., p. 410)。このような観点は、本質的には語彙と統語構造の間に厳密な境界線を想定しない構文文法に相通じるところがある^②。

Langacker (1987, 1990, 1991, 2008) ; Goldberg (1995) ; Goldberg & Jackendoff (2004) によると、構文文法や認知文法では、記号ユニットの場合は、形態素 (morpheme)、語 (word)、句 (phrase)、節 (clause) のどのレベルであれ、言語形式と意味との対応が慣習化し、さらに定着していれば、それらすべてが言語単位として言語知識の重要部分を構成する。Langacker (1987) は、次のように述べている。

The symbolic resource furnished by the grammar are of two basic kinds : ①specified symbolic units (including morphemes, polymorphemic lexical items, and larger conventional expressions) ; and ②established patterns, represented as schematic symbolic units, for assembling complex symbolic structures out of simpler ones.

(Langacker, 1987 : 66)

① 「Syntactic types of Accomplishments」は、Dowty 1979 によると、次のような 6 種類がある。

1. That-complement verbs : bring about that S.
2. Infinitive-complement verb : make NP VP, cause NP to VP.
3. Prepositional phrase complements : see under locatives above. Also turn NP into a noun, put NP to sleep, drive NP to drink, read oneself to sleep.
4. Factive (adjective of result) : hammer NP flat, wipe NP clean, wiggle NP loose.
5. Factive (Nominal of result) : elect NP president, chairman, appoint NP chairman.
6. Verb particle construction :
 - (i) Transitive : take NP out, chase NP away. Turn NP off ;
 - (ii) intransitive : go out, ran away, sit down, dry out. (ibid., p. 70-71)

② しかしながら、結果構文に限って言えば構文文法と異なるところは、Dowty (1979) では、語彙規則により主動詞と結果述語から構成される「factive verb」として扱っているという点である (ibid., p. 220-221)。Dowty (1991) では、Goldberg (1995) の構文文法と同様に、特定の文法構文 (grammatical construction) にもある特定の意味が結びついていると認めている (ibid., p. 608)。

Goldberg&Jackendoff(2004) も、Lexicon と Rule の間に原則的な境界線が存在しないと指摘し、次のように述べている。

THE CONSTRUCTIONAL VIEW

- a. There is a cline of grammatical phenomena from the totally general to the totally idiosyncratic.
- b. Everything on this cline is to be stated in a common format, from the most particular, such as individual words, to the most general, such as principles for verb position, with many subregularities in between. That is, there is no principled divide between 'lexicon' and 'rules'.
- c. At the level of phrasal syntax, pieces of syntax connected to meaning in a conventionalized and partially idiosyncratic way are captured by CONSTRUCTIONS.

(ibid., p. 2004 : 532-533)

このような認識のもとでは、動詞のような語彙項目は、Saussure 以来の伝統的な考え方のように、意味と形式の対応物であることは疑う余地のないことであろう。これも語彙的な構文 (lexical construction) である。構文文法で特に強調して主張されるのは、抽象的な特定の句パターン (phrasal pattern) や節パターン (clausal pattern) のような統語構造も、それを具体化する役割を果たす語彙項目とは別の、独立した存在であって、ある抽象的な意味を記号化することを認識しなければならないということである。言い換えれば、統語形式上の一単位 (記号ユニット) も、語彙や形態素と変わりはなく、いずれも意味と形式との対応が慣習化されて出来上がった項目のリストとして、メンタル・レキシコンに登録されており、概念構造の鋳型となるような共有経験の安定した抽出物である。

一、フレーム (frame) とプロファイル (profile)

構文文法で語彙項目の概念については、フレーム (frame) とプロファイル (profile) との対立で規定されている。フレームという概念は、元々人工知能 (AI) の研究において用いられたが、Fillmore (1977a, 1977b) などの一連の研究によって意味論の研究に持ち込まれたものである。フレームが表す概念は、Langacker (1987, 1991) の認知ドメイン (cognitive domain) や Lakoff (1987) の理想認知モデル (ICM) に相通じるものである。フレーム意味論の中心的な主張は、百科辞典的知識が語の意味の理解において重要な役割を果たすということである。言い換えれば、言葉によって表されるカテゴリーは、言語共同体の経験、知識、物の見方や価値観などを背景にしてはじめて理解されるものである。Narayanan&Fillmore&Baker&Petruck (2002) は、意味フレームについて次のように定義づけている。

The frame in question can be simple—small static scenes or states of affairs, simple patterns of contrast, relations between entities and the roles they serve, or possibly quite complex event types—which we can call scenarios—that provide the background for words that profile one or more of their phases or participants.

(Narayanan&Fillmore&Baker&Petruck, 2002 : 2)

フレーム意味論の考え方に従えば、一つの語は一つの既成の意味フレーム (estab-